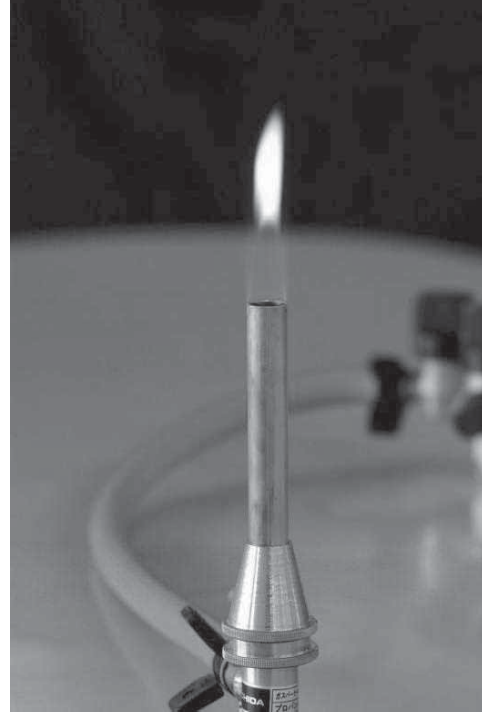


専門を生かして



私を変えた出来事

私は小・中学校での勤務をはじめ、高原山少年自然の家（社会教育主事資格取得のため国立教育研究所で研修）、児童自立支援施設に措置された生徒が通うA校等に勤務しました。色々な勤務先で色々な人と出会い、色々な仕事をし、色々な研修をしました。また、様々な場所で講演会活動もさせていただきました。それら全てが今の私の大きな財産であり力です。

その中でも特に私の考え方を変えてくれたのはA校での勤務でした。正式採用としては初めての養護教諭として赴任しましたが「保健室」と掲げてある部屋には、資料も教材も本もなく、ガラシとした、ただの四角い部屋でした。「どうやって健康教育をやればいいのか！」と半分怒りに似た気持ちになりながら途方にくれる毎日でした。そんな時、当時の教頭先生が「じゃあ、この子ども達に合う教材を作ればいいじゃないか。」と、いつも簡単なおっしゃったのです。私は「そんなく時間も無いし・・・。」と言うと「どんな教材があればいいの？」と聞いてくれ、自らホームセンターを回り、次々に独自の教材を作り始めたのです。コレステロール指導用教材・血球モデル等々、私の見たこともないような素晴らしい出来映えの教材に、ただただ驚くとともに、教材づくりの虜になっていました。「何もないから指導できない」ではなく「何もないなら作り出す」という考え方・行動力に大きな感銘を受け、それからの健康教育実践の根底になるものとなりました。

また、当時その施設には、小学三年生から高校生までの子ども達が入所していました。入所の理由は虐待・非行・暴行・不純異性交遊など様々でしたが、実はみんなとても良い

子です。「こんな良い子が何故事件を起こしてしまうのだろう」と大きなショックを受けました。毎日五校時目は、小学生の子ども達一人一人と過ごすようにしていました。その中に虐待を受けていた低学年の男子児童がいました。その子は毎回「お寺にお参りに行きたい。」と言うのです。手を繋いで学校の話や友達の話をしながらかお寺まで行くと、ご本尊の前に駆け寄り、熱心に手を合わせるのです。ある日「何をお願いしたの？」と聞くと、「お母さんが長生きできますように。お父さんが生き返りますようにってお願いしたんだ。この鐘の音もいい音だからお父さんに聞こえてほしいな。」と言うのです。他の子ども達も「お母さんが悪いんじゃないよ！僕が悪い子だったからいけないんだ！」「いくらダメな母さんでも、僕にはあの母さんしかないんだよ！」と話すのです。くり返しますが、この子どもたちは虐待を受けていたのです。私と遊んでいる時に見せてくれる笑顔と、お母さんが入所施設に来てくれた時に見せてくれる笑顔は全然違います。お母さんを見つけた時の笑顔はパツと輝く最上級の笑顔なんです。子どもが親を慕ういじらしい心に、改めて考えさせられ心を打たれました。本当に目から鱗の思いでした。このことはずっと私の心の中に深く刻み込まれています。たとえどんな親であろうと、子ども達にとっては大好きなお母さん・お父さんなのです。心の健康教育や教育相談活動をやる上で、この基本的なことをいつも心に思いながら実践してきました。

最後に「子ども達から好かれる先生になろう」と思っていた私を変えた言葉があります。「好かれる先生になるよりも、信頼される先生になれ！」この言葉は心に響きました。今も、そしてこれからの人生においても、私が生きていく上での指針です。

元 矢板市立川崎小学校 薄 井 恵 子

養護教諭として思うこと

私が養護教諭になって最初に勤務したのは県南にある生徒数が千人を超える共学の普通科高校でした。社会人になりたての頃は、職員室にいと何となく気づまりで、保健室に戻るとほっとしたものでした。

養護教諭の仕事は新年度すぐから始まります。職場のことが何もわからない中、連日健康診断の実施に追われ、悪戦苦闘した日のことが懐かしく思い出されます。また、県北出身の私は、県南の話言葉やイントネーションに少々戸惑いました。生徒に「先生って、訛っているね。」と言われた時はちよつとショックでしたが、生徒たちも同じように感じていたことを知りました。そんな新採に興味を持ったのか、多くの生徒が保健室を訪れました。「ぶつけた。痛い。」「気分が悪い。」などとやってくる、手当てを受けながらひとしきり話をしては教室に戻って行きます。放課後もおしゃべりをしに来てください。彼らと楽しく話をしながら、生徒の様子や学校のことを知ることが出来ました。慣れない仕事でバタバタしている私に、声をかけてくれたり、手伝ってくれたりと助けられたことも多かったです。当然のことながら、職場の先生方には、様々な場面でご指導ご協力いただき、大変お世話になったのは言うまでもありません。

多くの生徒たちはそれぞれ元気に高校生活を送っていました。でも時々、暗い表情や態度がいつもと違う、ちよつと気になる生徒がいます。そのような生徒に、どう接したら良いのだろうと悩むことがあります。そこで、教育相談の研修を受けました。

研修を受けて私が収穫だと感じたのは、「気づくこと」の大切さを知ったことです。何

より、自分自身の見かたや考え方に気づいたことが、大きいと思います。と同時に、相手の見かたや考え方に目を向けること。自分の物差しに縛られず、柔軟に物事をとらえること。時には実践が難しいこともありますが、心がけていることの一つです。

養護教諭をしていると、突然のけがや病気の発生で、迅速な状況判断や救急処置の対応を迫られることがあります。こんな経験をしました。体育の授業中にソフトボールのゲームをしていて、打者の手を離れたバットが勢いあまって、近くにいた男子生徒の側頭部を直撃しました。担架で保健室に運ばれてきた生徒は、意識はありましたが、かけていたメガネは破損し、傷口からはかなり出血していました。私はとっさに、傷口にガーゼを当てて止血しながら、そばにいた体育の先生に救急車要請の連絡を頼みました。そして、やってきた救急車に乗り、生徒に付き添って医療機関に向かいました。その後も、何度か救急車を要請する出来事に遭遇し、緊急時にあわてず適切に対応できるよう、救急処置の技術をしっかりと身に付けるよう努めました。また、一人での対応は困難なので、校内の連絡手順や役割分担などの体制を整え、誰もが対応できるよう全職員が救急処置の講習を受けておくことが必要だと思っています。最近、様々な危機管理の面からも重要だと考えます。

若い時には、生徒と年齢が近いことで共感や理解できる良さがあります。そこから、様々な経験を積んでいくなかで、徐々に身に付いた力もあります。その時々、困難と思う事柄にぶつかっては悩み、迷いながら、試行錯誤を続けてきて、現在の自分があるのだと思っています。

健康で笑顔あふれる子どもたちのために

私の食育の原点は、黒田原小学校で行った「健康教育の推進」です。保健・体育・給食を軸に学校全体で取り組む「健康教育」は、まさに今求められている食育の始まりであったと思います。その研究に関わらせていただいたことが、私の栄養教諭としての基盤となつていきます。当時の栄養職員の本務は、おいしい給食を作ることや給食の時間の指導でした。子どもたちの前で授業を行うなど考えられないことでした。この研究推進にたずさわること、授業へ参画したり指導案を作成したり授業をするための資料や教材を作成したりするなど多くのことを体験することができました。指導者として未熟な私に、たくさんのかことを指導してくださった先生方に、感謝しています。

平成十七年には食育の必要性がクローズアップされ、学校における食育の普及啓発の担い手として栄養教諭が制度化されました。栄養教諭としての新たな一步を踏み出すことになりましたが、自分はどうのように仕事をしていくのか悩んでいた時に、校長先生から「新たに始めるのではなく、今までやってきたことを土台に進めればいい。自分は何をしたいのか、それをどう具現化するかを考えてやってみなさい」とご指導いただきました。若草中学校で取り組んだ「学習農園活動」をとおした食育の推進は、大きな成果を得ることができました。土作りから始まり種まき、除草、収穫を行い、給食の食材として生まれ変わる。これこそが生きた教材としての給食の役割です。土に触れることがなかった生徒たちが、生き生きと変わっていく姿を目にした時の感動は忘れられません。この活動から学んだことは、協力体制の大切さです。一人の力は小さいけれど、教職員、家庭、地域が一

体になることで食育が推進され、子どもたちが変容していくのだと思いました。

現在、黒磯学校給食共同調理場に勤務し、受配校の多くの児童生徒へ食育を実施しています。授業は、全クラス一年に一回しか行うことができませんが、毎日の給食から食育の大切さを教えていきたいと考えています。例えば、「世界の料理」や「日本の郷土料理」などをテーマにした献立から食文化について関心をもたせるような工夫をしています。当初は、所属の黒磯中学校においての食育は何もできていないという思いがありました。少しずつ食育に関わることでできてきました。これはひとえに、校長先生をはじめとした教職員の皆様のおかげだと感謝しています。自分が置かれた立場で、どのように関わっていくかや推進していくかを考える行動することの大切さを感じています。

私のモットーは、いろいろなことに興味関心を持ち、挑戦していくことです。それは、とても楽しいことです。時には、障害にぶつかりくじけそうになることもあります。でも、子どもたちや多くの先生方と巡り会えたことが、私の励みになっています。「よし、また頑張ろう!」そんな気持ちになります。そして、大切なことは子どもたちに愛情をもつて接することです。きつと、一生懸命さが伝わり、子どもたちはそれに応えてくれるはずです。給食は食育の「生きた教材」です。先生方、是非それを活用してください。私たち栄養教諭・栄養職員は「生きた教材」となるような給食を実施していくことを心がけたいと思います。担任の先生方の手伝いを、私たちにさせてください。

食育は、日々の小さな積み重ねです。将来を担う子どもたちが、健康で笑顔あふれる生涯を送ることができるよう、みんなで手を取り合って食育を進めていきましょう。

那須塩原市立黒磯中学校 山田 厚子

今 思うこと

この仕事を始めてから、三十年余りが過ぎ、振り返ってみると、平成十九年に学校栄養職員から、栄養教諭に替わったこともあって、長かったような、短かったような感じがしています。

私が新採の頃は、今のような「新規採用研修」や指導教員もなく、学校栄養職員という職業柄、学校にひとりしかなくて相談する職員もなく、途方にくれていたことを覚えています。そのうえ調理現場は、学生時代に習ってきたことをそのまま実行できる環境でなく、何をしたらよいのかわからず、ただ前任者の帳簿を追いかける日々でした。

また、私の赴任した学校は、調理員さんが二人で、どちらかがお休みすると、検収から片付けまで現場に入っていて、毎日毎日が目の前の仕事でいっぱいでした。

しかし慣れてみると、私の立てた献立を私が入って実際に作ってみて、現場の調理員さんの意見を聞いたり、実際に回転釜やオーブンを自分で動かしたりしてみると、献立が調理現場に合っているかや何があるときるかや何を考え直すべきかなど課題が自然とわかってきました。このことは、貴重な体験だったし、必要なことだったと思っています。

私たちの調理現場は、一つ一つの大きさ、調理スタッフの数や質も違います。学校での食育の基本は学校給食なので、そのような違いを自分の目でしっかりとみて、自分で体験し、現場にあった方法を見つけていくことは、食育を始めるためにも大切な一歩です。

さらに、児童生徒の指導についても、自分の学校の児童生徒を自分の目で、自分の耳で、自分の体で感じて、児童生徒の実態をしっかりと理解することが大切です。

そうすると、同じテーマや教材を使用しても全く違う授業になるだろうし、児童生徒の反応も違ったものになっていくでしょう。その児童生徒の反応を自分がしっかりと感じて、次に生かしていくことが重要だと思います。

例えば「きらいなもの」が一回の指導で「食べられるようになる」「好きになる」ことはまれで、何回も繰り返し同じ献立をだして指導したり、調理法や組み合わせを覚えてみたりします。その時に毎回、児童生徒の様子を観察することが大切です。「前は、食べなかったけど今回は、どうか」や「カレー味だと食べるね」など、指導した結果を把握して、次は、どうしていくかを決めていくことです。

今後こどもたちの「食」をとりまく課題は、食物アレルギーをはじめ様々なことがあると思います。その時に配慮する点として、一つ目には、「食」は、食体験や家庭環境によって個人差が大きいのでそれらを配慮して進めること、二つ目は、何かを始める時には、関係する職員や同僚と連携をとること、三つ目は、研修を重ね確かな情報をもつことだと思います。

色々とりとめなく書いてきましたが、一人職種ということで責任が重く、押しつぶされそうになることもあります。そんな時こどもたちの笑顔に救われています。こどもたちの「今日の給食なあに」の声に「元気をもらっているなあ」と感じています。

是非そんな声に耳を傾けて、そこから始まる「食育」を推進してもらいたいと思っています。

聞くは一時の恥・自分の宝を増やす

私の専門は建築です。昭和四十三年に宇都宮工業高校定時制に入学し、建築の基礎からの勉強が始まりました。父が大工をしていたので興味・関心・憧れを抱き、建築の道を選択したのだと思います。

その日から、毎朝七時から十五時まで大工の修行をした後、着替えて学校に行き、十七時から二十一時まで授業を受け、放課後一時間半程の部活動で汗を流して、帰宅という毎日でした。

そんな四年間で学んだことは、何と言っても、建築の基礎基本を学びながら現場での実践を通して、失敗は許されない緊張の中で、親方・先輩の技術を見て盗み覚えることです。当然、親方・先輩達も仕事中ですから、手を止めてまで詳しく説明してくれないし教えてもくれませんので、休憩・昼休みが貴重な時間になります。何でも聞いて教えて貰い、忘れないうちにメモを取りました。失敗をしながら、何回も実践をして体で覚えることの大切さなどを実感することの繰り返しで、四年間が終わろうとしていました。

そんな中、担任の先生から卒業後、実習助手として働いてみないかと声を掛けていただきました。そして、その年の四月から定時制の職員として、勤務することになりました。

それからは、親の仕事を手伝いながら、定時制の職員としての生活がスタートしたのですが、大丈夫なのかという心配と不安で一杯でした。しかし、私の気持ちの片隅には多少なりとも、木材加工に関する技術には自信がありました。でも、教わる立場から教える立場になり、そこには大きな壁が立ちました。

生徒達に何かを教えて理解出来るように指導する力など全く無い当時の私は、生徒と一緒に授業を受けている状態からスタートしました。空き時間や放課後を使い、沢山の疑問・不安なことの質問ばかりしていました。全ての先生方から親切丁寧に優しく指導をしていただき非常に助かりました。あまりにも初歩的な質問ばかりで、こいつ大丈夫なのかと思っていたと思います。今だから、恥ずかしく無く聞けると思い、沢山聞いて多くのことを一つ一つ学ぶことが出来ました。

何かを教えて理解して貰う為には、自分が全てのことを確実に理解し、実践をして、納得していなければ、相手に上手く伝えられないし理解もしては貰えないと思います。机上だけでの納得では無く、実践を通して体で覚えることが重要です。体で覚えたことは、何年経っても忘れません。職種が違ってても、必ず多くの仲間がいます。私は、人生経験が豊かで沢山の知識・技術を持った先輩から、それらを盗み、体で覚え、自分の宝にしようと頑張ってきました。恥ずかしいなど思わず、何でも聞いて、失敗を恐れず、何回も何十回でも実践して、体で覚えて自分の宝の数を増やして下さい。「聞くは一時の恥・聞かぬは一生の恥」分かりやすい説明をしながら、技術指導も出来るように、そして、常に一つ上の知識・技術を目指すことも忘れないで下さい。

今までに出会った、多くの先生方の素晴らしい知識・技術をもっと沢山盗み、自分の宝を増やせていたら、もっと分かりやすく楽しい授業が出来ていたのではと、今でも後悔と反省をしています。これまで、多くの方々にご指導いただいたことに感謝申し上げます。これからも、知識・技術の向上はもとより、視野を広く持ち日々研鑽していくつもりです。

寄宿舎と共に歩んできて

「光陰矢の如し」とはよく耳にする言葉ですが、本当に格言どおり、年月は弓矢が飛んで行く如く私の人生を通り過ぎようとしています。寄宿舎指導員になって三十五年、今回このメッセージ依頼をいただいたことで、自分の指導員生活を振り返るよい機会を得られましたことに感謝いたします。そして、未熟な私の経験が、若い皆さんの役に立てれば幸いと思ひペンを執らせていただきます。

初めて赴任した盲学校で、小学部一年生を担当した時のことです。何もわからないままに、生まれて初めて親元を離れて生活することを余儀なくされた女の子は、約一か月、学校から帰ってくると毎日しくしくと泣いていました。彼女にとって寄宿舎はどんな場所なのだろうか、どうすれば心を癒せる場所にできるのか、まだ若かった私は、彼女の気持ちを受けとめる術もなく、一緒に泣き出した気持ちでした。その時の私は、そんな気持ちが表情に出ていたのだと思います。先輩が「今は一緒に泣いて一緒に笑って、ただそれだけでいいじゃない!」と言葉をかけてくれたのです。焦って結果を求めるのではなく、気持ちを共有することの大切さを気づかせてくれた一言でした。

また、那須特別支援学校で高等部一年生を担当した時のことです。彼は嘘をつくことが多く、自分の中で彼への信頼が崩れかけていた時でした。つじつまが合わない嘘を繰り返すことに対して問い詰めていくと、とても悲しそうな顔をして、本当のことを話しはじめました。父親（父子家庭）をかばうための嘘だったのです。子供にとっては、どんな理不尽なことをされても親は親なのです。唯一無二の存在なのだと、改めて思いしらされました。

た。そして、彼の嘘の裏にあった親への思いに、早く気づくことができなかった自分を恥ずかしく思いました。

いつも感じていることですが、寄宿舎ほど立ち位置の難しい教育機関はないと思います。家を離れて生活している子供達にとっては、家庭に代わる所であり、学校から帰ってきてほっとできる場所であればなりません。と同時に異年齢集団の中で、基本的な生活習慣や対人関係を学ぶ教育の場でもあります。家庭的機能と教育的機能の両方を兼ね備えている寄宿舎教育は、なんて奥が深く難しい仕事なのかと思います。でも、だからこそやりがいがあり、より深く子供達とかかわれる場所でもあると思うのです。これから先、必ずいろいろな壁にぶつかると思いますが、一人で思い悩み焦って答えを出そうとせず、大きく息を吸って周囲を見渡し、子供達や保護者、同僚の声に耳を傾けてみてください。小さな気づきから必ず出口が見つかるはずで「教育は共育」でもあります。子供達や保護者と共に自分自身も学びながら、周囲のみんなと子供への思いを共有し、彼・彼女達が小さな一歩を歩みだせるよう努力することが大切なのだと思います。

本県で、寄宿舎を併設している特別支援学校は五校しかありません。私達は少ない人数の職種であるため、その存在意義を常に問われ続けています。今後の寄宿舎教育がより充実したものとなり、多くの子供達の笑顔が増えていくためには、皆さんの若い力が必要です。旺盛な好奇心と瑞々しい感性、柔軟な思考力、若者の特権をフル活用し、寄宿舎教育という世界に舟を漕ぎ出していつてくださいます。

今後の精進、御活躍を期待しています。

栃木県立那須特別支援学校 大山 純子

読み、書き、ソロバン

古くから教育の根本を成すものは、「読み、書き、ソロバン」などといわれていました。私が採用された当時はアナログな時代であったためか、これら文字通りのスキルが求められ、正確迅速に事務処理をし、給与・旅費・会計などのルーチンワーク的な事務に終始していました。

しかし、今ではこのような事務は、ICT機器をもってすれば、より正確に迅速に処理できるようになりました。

では、この「読み、書き、ソロバン」は不要なスキルになったのでしょうか。

私は、逆にこれらのスキルをさらに発展させることこそ、今こそ必要なスキルであると思います。「読み」は時代の流れや変化を読み、さまざまな情報や課題を認識すること、「書く」は、自分の考えや伝えたいことを正確に表現し提案すること、「ソロバン」はさまざまな数値を論理的に理解し活用すること・・・。

さて、学校には、教員の多忙化や今後十年間の大きな世代交代など様々な波が押し寄せてきています。もちろんこれらの波は、全教職員で乗り越えていかなければなりません。それぞれの立場で、きちんと波を捉え、自分の役割をしっかりと認識し、自分の持っているスキルをフルに使いこなしていくことが必要です。

例えば、教員の多忙化の解消を考えてみた場合、何が多忙化を生んでいるのか、何がそうさせているのかを読みとり、現在教員が行っている様々な事務のなかで、事務職員ができる事務は何かをはっきりと認識することが大切だと思います。では、どのような事務が

可能なのでしょうか。私は、基本的に免許資格が必要でない事務にその可能性があると思います。そして、事務職員が行った方が、より効果的・効率的な事務は、積極的に担うべきであると考えます。

そうは言っても、私たち事務職員も複雑多様化した事務処理に忙殺されているのも事実です。しかし、ICT機器を活用すれば、相当な事務処理の効率化が図られるのではないのでしょうか。もちろん、それには機器活用のためのスキルが必須です。

また、事務職員は一人職や経験の差という壁もあります。だからこそ、学校事務の組織化による共同実施を前向きに捉え、活用することにより、その壁を乗り越えられると思います。

ルーチンワーク的な事務や単位事務のみの職務は、もしかすると他のセクションでも可能な事務となり、また、アウトソーシングでも充分な職務になってくるかも知れません。

しかし、時代の要請には、必ず事務職員が必要な場面があるはずです。それには、自分の考えだけではなく、教職員からはもちろん、子どもからの要請、地域からの要請をはっきり捉え、目標を設定し、行動を起こし、成果を求めていかなければなりません。そして、その効果を検証し次につなげていくことが必要であると思います。それにより事務職員の新たな職務領域の拡充が期待されます。

そのためにも、これからの事務職員の皆様には、ぜひ、現代版「読み、書き、ソロバン」のスキルを身につけ、クオリティの高い学校事務をとおして教育目標の具現化に努め、子ども豊かな育ちを支援していくことを切望しています。

野木町立野木第二中学校 大橋利昭

事務長・事務職員の心構え

◇はじめに

私が県職員としてその職務を全うし、無事に定年退職を迎えられたのは、これまで関係した多くの皆様に支えられてのお陰と感謝しています。長い県職員生活では、色々なことがありましたが、ここではその経験を踏まえ、私なりに思うところを綴ります。

今、事務長・事務職員の皆さんは、どこを向いて執務していますか。

栃木県職員として採用以来「全体の奉仕者として、県民・国民に奉仕する」ことを常に頭にたたき込まれてきたかと思います。学校職員も同じです。むしろ、学校という職場は常に県民の皆さんから注視されて、トラブルが発生すると瞬く間に全国に広まってしまう。それほどに、県民・国民の皆さんが関心を示す職場なのです。

◇事務長としてなすべきこと

事務長は、学校経営に積極的に参画すべきです。具体的には、校長を良く補佐し、行政的視点からのアドバイスを行うべきです。事務長としての第一は、校長の良き補佐役に徹する。そして、校長の考えをよく理解し、行政面での疑問があったら、躊躇なく意見を言うべきかと思えます。どんなに素晴らしい校長でも、行政には不慣れな部分もありますから、そこをよくカバーする。この点こそ、事務長の一番の腕の見せ所ではないでしょうか。時には、嫌われ口の一つや二つも言わなければならぬ。それは校長に反発しなさいというのではなく、よく議論を、ということなのです。

事務長がこれまでに培った行政手法をそのまま学校に用いようとして、校長や教職員と

摩擦を生じさせていると耳にすることがあります。学校には、杓子定規には処理できない教育的配慮の必要が多いのです。それは、言うまでもなく大切な児童生徒を教育する場だからです。このことは、行政事務長の一番苦勞するところかと思えます。しかし、一旦、校長が教育方針を決めたら、当然その方針に従って執務すべきです。なぜなら、事務長はよりよき学校実現のために、積極的に校長を補佐しなければならないからです。

◇事務職員としてなすべきこと

事務職員は、自分の業務分担を遂行することはもちろん、同僚の業務についても積極的に支援していくべきです。最近、特に職場環境での連携・協力の希薄さを感じるので、これは最も重要なポイントではないでしょうか。「自分さえ良ければいい」「自分の分担さえできればいい」といった考えでは、学校の教育環境が良くなるはずがありません。どんな組織にも言えることですが、職員全員が一致団結して事をなさなければ、決していい結果は見いだせないものです。このことを、私は声を大にして皆さんに言いたいのです。

◇終わりに

事務長・事務職員は、教育行政、特に学校の業務には違和感を感じているかと思います。それぞれの学校には、創立以来の幾多の人たちが築き上げてきた伝統というものがあります。皆さんには、それらの良き伝統を重んじながら、そして、今を生きる皆さんの豊かな感性を多く取り入れて、与えられた業務を遂行することが最も望まれることです。「どこを向いて執務すべきか。」

それは、常に児童生徒一人一人、彼らを向いての執務なのだと私は思います。